

河越重頼の娘——源義経の室——

細川 涼一

はじめに

源義経（一一五九—一一八九）には、河越重頼の娘（一一六八—一一八九）、静（一一六八？—一一八七？）、平時忠の娘（一一六三？—？）の三人の妻妾がいた。このうち、『吾妻鏡』に最も記事が多く、著名なのは白拍子静であろう。これに対して、義経の正妻である河越重頼の娘は、源頼朝の計らいによる義経との婚姻（元暦元年（一一八四）九月十四日条）、謀叛人となった義経の奥州下向への同行（文治三年（一一八七）三月十日条）、奥州平泉において義経とともに自殺（文治五年（一一八九）閏四月三十日条）、と『吾妻鏡』においてもわずか三カ所しか記事がない。⁽¹⁾

この理由によるものであろう、義経には多くの伝記的研究があり、近年でも保立道久氏⁽²⁾、元木泰雄氏⁽³⁾らによる好著が相次いで刊行されたが、河越重頼の娘についてはほとんど注目されていない。しかし、河越重頼の娘は頼朝による源家（将軍家）一族の婚姻政策を知る上で

鍵となる女性であり、ひいては北条氏の立場に立った『吾妻鏡』による記事の操作を考える上でも重要な女性である。そこで本稿では、河越重頼の娘について考えてみることにしたい。

一 河越重頼の娘と父河越重頼

河越重頼の娘が源義経と婚姻するため、京都に上洛したのは元暦元年（一一八四）九月十四日、十七歳の時である。そのことを『吾妻鏡』は次のように記している。

十四日庚子、河越太郎息女上洛、為相嫁源延尉也、是依武衛仰兼日令約諾云々、重頼家子二人、郎従三十余輩從之、首途云々、すなわち、河越重頼の息女が義経に嫁すために上洛した。これは頼朝の仰せによつて兼ねてから約諾されていたことにもとづくものである。重頼の家子二人、郎従三十余人がこの門出に従った、というのである。義経の妾、静の年齢は『義経記』⁽⁵⁾を前提とするしかないが、それと河越重頼の娘を照らし合わせるなら、二人はともに仁安二年（一一六

八)の生まれ、同い年ということになる。義経が二人を妻妾にしたのは、ほぼ同時期であつた。⁽⁶⁾

本稿は、順序として彼女の父母に触れておくことからはじめたい。

河越氏は、武蔵国に勢力を有し、武蔵国の留守所総(惣)検校職(武蔵国内武士団の統率権)を代々務めた秩父氏の一族で、彼女の父河越太郎重頼は、同じく鎌倉幕府の御家人となつた畠山重忠・江戸重長と同族である。河越重頼は治承四年(一一八〇)八月の頼朝の挙兵にあつては、はじめ同じ秩父一族の畠山重忠の要請で、平家方に立つた。八月二十六日に頼朝方の三浦一族の居城、相模国衣笠城を重忠・江戸重長とともに攻め、三浦義明を討ち取っている。しかし、十月四日、長井の渡において重忠・重長とともに頼朝に降つてその御家人となつた。

『吾妻鏡』治承四年八月二十六日条によると、河越重頼は秩父家においては次男の流れではあるが、家督を相続し、武蔵国の武士団を率いていたので、畠山重忠は三浦義明の衣笠城攻撃にあつて、重頼に参加を要請したとある。岡田精一氏・野口実氏はこのことから、河越重頼が秩父家家督を継ぎ、武蔵国留守所総(惣)検校職を掌握していたと述べているが、両氏の指摘は正しいであらう。⁽⁸⁾ちなみに、秩父重綱の長男・重弘の孫が畠山重忠、次男・重隆(久寿三年(一一五五)八月の大蔵合戦で頼朝の叔父義賢(木曾義仲の父)に味方し、頼朝の兄義平に討たれている)の孫が河越重頼、三男・重継の子が江戸重長である。そもそも、同じ秩父一族の畠山重能・重忠父子が武蔵国における平家の大番役の統率に当たり、積極的に平家郎等となつたのに対して、

河越重頼の妻は頼朝の乳母比企尼の娘であり、重頼ははじめ一族の畠山重忠の要請で平家方に付いたにも関わらず、流人時代の頼朝を扶助するなど頼朝とも深い関係にあつた(この点は後述)。このような理由によるものであらう。寿永元年(一一八二)八月十二日に頼朝の長男、頼家が誕生した際には、重頼の妻はその日のうちに頼家の乳母になっている。

元暦元年(一一八四)正月二十日、頼朝の代官として二人の弟、源範頼軍が近江の瀬田(勢多)から、源義経軍が搦手の山城の宇治から木曾義仲軍を破り、入京した際には、河越重頼は義経軍に従つていた。京都には、搦手の義経軍が宇治川の戦いで義仲軍を破つて大手の範頼軍よりも先に入京した。義経軍に追われる形で京都から落ちた義仲は、瀬田において範頼軍と衝突し、義仲は近江粟津(現滋賀県大津市)で敗死している。入京後、義経が後白河法皇の六条西洞院の御所を警護した際に、重頼は子の小太郎重房や佐々木高綱・畠山重忠・渋谷重国・梶原景季らとともに義経の手の者として御所の警固に当たっている。さらに正月二十九日、範頼が大手五万六千余騎の大將、義経が搦手二万余騎の大將として平家追討のため西国に下つたが、この時も河越重頼・重房父子は義経軍に従つた。そして、二月七日の一ノ谷合戦(現神戸市須磨区の一ノ谷が合戦の中心地。合戦はその東の現神戸市兵庫区の福原から現神戸市中央区の生田の森にまで広がっている)では、平経正(清盛の弟、経盛の嫡子)が平家の助け船に乘ろうと汀の方に落ちたところを、重房が討ち取っている(『平家物語』巻第九「知章最期」⁽¹⁰⁾)。

また、平重盛の末子平師盛も河越重頼の郎等が討ち取っている。す

なわち、師盛らが落ちのびようとした小船に、平忠度の郎等の豊島直治が無理に乗りとうと崖から飛び降りたため、小船が傾き、乗っていた平家軍が皆海に落ちた。そこに重頼の郎等十郎大夫らが八騎で駆けつけて熊手で引き揚げ、首を切った。中に師盛が鉄漿（お歯黒）を付けていたので、十郎大夫は平家一門の公達であろうと考え、名を名乗るように勧めたが、師盛は「お前たちに名乗るつもりはない。後で人に聞きなさい」と述べ、名乗らないで討たれた。ほかの人の証言から重盛の子の師盛と分かった、というのである。時に師盛わずかに十四歳であった（『長門本平家物語』巻第十六「備中守師盛討たる事」⁽¹¹⁾）。

『吾妻鏡』元暦元年二月七日条では、平経正・平師盛とともに甲斐源氏の安田義定隊に討ち取られたことになっている。搦手の義経軍は、一ノ谷合戦に際して、有名な鶴越（俗に言う鶴越の場所は、実際には一ノ谷背後の鉢伏山・鉄拐山）で一ノ谷を急襲した義経隊と、明石に迂回して西方から一ノ谷を攻撃した安田義定隊の二つに分かれたのである⁽¹²⁾。このことを考えるなら、河越重頼・重房父子は、一ノ谷合戦に際して安田義定隊に属したと考えていいであろう。

このように、一ノ谷合戦で安田義定隊に属して、平家一門の平経正・師盛を打ち取る活躍をした河越重頼・重房父子であるが、凱旋後、頼朝の代官として在京した義経に従って京都に留まることはなく、頼朝の命で鎌倉に戻ったようである。というのも、木曾義仲が減ぼされたことを契機として、義仲の人質として鎌倉にいた義仲の嫡子志水冠者義高（大姫の許婚^{いとうけ}）が四月二十六日に頼朝の命で堀親家の郎等に討たれた。その余党が甲斐・信濃に隠れて叛逆しようとしているという

風聞（噂）が立ったので、五月一日に軍兵が派遣されることになった。この時、甲斐国には足利義兼・小笠原長清らが御家人を率いて発向し、信濃国には小山・宇都宮・比企・河越・豊島・足立・吾妻・小林らの御家人が下向している。すなわち、河越重頼・重房父子がこの時点では関東に戻っていることがうかがえるであろう。

この間、河越重頼の娘を京都にいる義経に嫁がせる頼朝の計画が進行したようであり、この年の九月十四日に重頼の娘が上洛することになる。

二 母・比企尼の娘と祖母・比企尼——河越重頼の娘の女系から

一方、彼女の母は頼朝の乳母であった比企尼の娘である⁽¹³⁾。『吾妻鏡』寿永元年（一一八三）十月十七日条によれば、掃部允某の妻である「比企氏系図」によれば、彼女の夫掃部允は源為義の家人であった比企遠宗である。ただし、浅香年木は比企尼の夫を比企宗員とし、遠宗

（浅香は能員の父とする）や、「比企氏系図」が遠宗と比企尼の子とする朝宗とともに宗員の弟と推測する⁽¹⁴⁾。彼女は京都六条堀川の源義朝邸において頼朝の乳母として頼朝を養育したと考えられる。永暦元年（一一六〇）、平治の乱に際して頼朝が十四歳で伊豆国に流罪になった際、比企尼は養育してきた頼朝のため、夫の掃部允とともに請所であった武蔵国比企郡に下向し、治承四年（一一八〇）秋、頼朝が伊豆に挙兵するまで二十年間にわたって、比企郡からの年貢で頼朝を経済的に支え続けた。

また『吉見系図』の源範頼の注記⁽¹⁵⁾によれば、比企尼には三人の娘がいた。長女はじめ二条天皇に女房として仕えて丹後内侍と名乗り、京武者の惟宗広言と密通してその間に島津氏の祖となる惟宗（島津）忠久を生んだ。その後、関東に下向して安達盛長と結婚した。次女が河越重頼の妻である。三女は伊藤祐清の妻となった。比企尼は流人の頼朝を哀れんで所領の比企郡から糧食を運送し、三人の婿に命じて頼朝を扶助させた。しかし、三人の婿のうち、伊東祐清は平家方に立つて討ち死にしたので、頼朝は比企尼の三女を一門の平賀（大内）義信と再婚させ、その間に平賀朝雅が生まれたという。この平賀朝雅は北条時政の婿となった。すなわち、比企尼は事実上、不遇時代の頼朝にとって母代わりの位置にあったのである。

このような比企尼の長年の奉公に報いるため、頼朝は寿永元年八月十二日に嫡子頼家が誕生すると、比企尼の娘である河越重頼の妻を乳母に選んだ。さらに十月十七日、赤子の頼家が母政子とともに産所の比企谷殿（比企尼の家）から頼朝邸に入ると、比企尼の甥でその猶子となっていた比企能員が、比企尼の推挙によつて頼家の乳母夫に選定された。すなわち、ここでは乳母と乳母夫は夫婦ではなく、実の従姉弟にして、能員が比企尼の猶子ということで述べるならば、姉弟同士の関係ということになる（恐らくは河越重頼の妻よりも能員の方が年下であろう）。

頼朝が鎌倉に政庁を整えると、比企尼も比企郡から鎌倉に呼び寄せられ、鎌倉の比企ヶ谷に家を与えられてここを永住の地とした。北条政子は頼家の出産に際して、比企谷殿を産所としているから（『吾妻

鏡』寿永元年七月十二日条、これ以前に比企尼は鎌倉に住んでいることがわかる。

文治二年（一一八六）六月十六日には、頼朝は政子とともに比企尼の家を訪れている。比企尼の家は木陰にあつて納涼の地である上に、瓜園があつて興趣に富んでおり、二人は終日遊園した。翌文治三年（一一八七）九月九日の重陽の節句にも、頼朝と政子は比企尼の家の南の庭に白菊が開いたのを愛でに出かけている。この時は三浦義澄・足立遠元らの宿老も随行し、終日酒宴をするともに比企尼に贈り物をした。

比企尼には、猶子の能員のほか、「比企氏系図」によれば実子の朝宗もいた。朝宗は「鎌倉殿勸農使」として、頼朝のもと北陸道の国衙在庁指揮権を分掌し⁽¹⁶⁾、文治二年（一一八六）九月二十日には京都で義経郎従の堀景光を捕らえ、さらに佐藤忠信を自殺させ（『玉葉』）、十月十日には義経を匿った廉で興福寺の聖弘得業の坊を搜索するなど（『吾妻鏡』）、頼朝の信任も厚かった。それにも関わらず、比企尼が能員を猶子とし、頼家の乳母夫に推挙するなどして比企一族の惣領に指名したのは、当時すでに高齢であつた朝宗には女子が一人いるのみで、男子の後継者が望めなかつたためであらう。ただし、この後、文治四年（一一八八）正月二十二日に、北条政子の官女として越後局と号した比企朝宗の妻が男子を生んでいる。しかし、恐らくは比企尼も予期せぬ形で生まれたこの男子が、その後どうなったかはわからない。少なくとも、比企氏の惣領が能員から朝宗の子に移つたという事実はないし、朝宗と能員の間で比企氏内部の内訌があつたという事実もない。

朝宗の娘は幕府の官女として頼朝に仕え、姫前と呼ばれる「権威無双の女房」であった。『吾妻鏡』建久三年（一九二）九月二十五日条によれば、姫前は容顔が美麗であったので北条義時が懸想してこの一両年にわたって文を遣わしたが、姫前の方はその気もなかった。しかし、頼朝がそのことを聞き、義時に姫前を絶対に離別しないという起請文を書かせ、義時と結婚することを勧めたので、姫前はこの起請文を貰った上で、この日義時と結婚した。以上の経緯に鑑みるならば、姫前は義時の正妻であったと考えられる。義時と姫前の間に生まれた朝時を祖とする名越氏が、寛元四年（一二四六）五月の名越光時の乱（寛元事件）、文永九年（一二七二）二月の騷動（名越時章・教時の誅殺）と、泰時（母は官女阿波局と伝わるのみで、この女性については未詳⁽¹⁷⁾）を祖とする得宗家にたびたび反旗を翻したのは、⁽¹⁸⁾姫前を母とする朝時こそ北条氏の嫡流という意識があったからであろう。このことは、北条時政の邸宅である名越亭が名越朝時に継承されていることにもうかがえる。ただし、義時と姫前の間に生まれたもう一人の男子、重時を祖とする極楽寺流（赤橋氏）は終始得宗家を支え続けた。姫前が「権威無双の女房」と呼ばれたのは、彼女が比企尼の正系の孫であったからなのである。

三 河越重頼の娘と源義経の婚姻

以上に見てきたように、河越重頼の娘は女系を通じて頼朝の乳母である比企尼に繋がり（すなわち、彼女は比企尼の孫娘）、父系を通じて武

蔵国留守所総檢校職を掌握し、武蔵国武士団を統率した河越氏に繋がる。まず、武家の娘の中では有力層の出自といっているであろう。

河越重頼は『吾妻鏡』には、畠山重忠と比較しても記事を省略したかと思われるくらいに登場頻度が低く、このことから『川越市史』は、河越重頼は「頼朝の信頼を欠いていた」と述べ、「義経の妻に重頼の女を選んだのも、初めから企てる所があつての所為と見られる」と推測している⁽¹⁹⁾。しかし、これは河越重頼が義経に連坐して滅ぼされたことからの結果論というべきであろう。

また木村茂光氏は、頼朝が秩父氏一族の中では河越重頼よりも畠山重忠に重点を置いたと述べ、「頼朝の執拗な河越氏無視・排除」の態度を『吾妻鏡』から読み取っている⁽²⁰⁾。しかしこれも、頼朝が一方で河越重頼を義経の外戚にする厚遇を与えたことや、重頼の妻を頼家の乳母にしたことを捨象した一方的な議論であると思う。木村氏による異論はあるが、ここでは頼朝のもとに参陣した時点で、秩父一族の中で武蔵国留守所総檢校職は河越重頼、京都大番役の統率権は畠山重能・重忠父子に分掌されていた、とする野口実説に従っておきたい⁽²¹⁾。頼朝にとって河越重頼・畠山重忠は武蔵国の武士団を率いる実力者として、ともに重視すべき存在であったのである。

頼朝の時代における河越氏と畠山氏の衰運の違いは、河越重頼が義経の外戚となる幸運を得ながら、わずかその一年後の義経の没落に連坐して滅んだのに対し、畠山重忠は北条時政の娘婿として、少なくとも頼朝時代には北条氏と雁行する形で興隆し、同族の河越重頼の没落によって武蔵国留守所総檢校職も重忠が継承して秩父一族の嫡流とし

ての位置を与えられた⁽²²⁾、という違いによるのである。

河越重頼の娘と義経の婚姻が成立した元暦元年（一一八四）九月の段階では比企尼はまだ生存しており、頼朝が計画したこの婚姻は、比企尼とも相談して進められた可能性が少なくない。ただし、義経と河越重頼の娘の婚約は、寿永二年（一一八三）十月、義経が頼朝の代官として義仲追討のために鎌倉から出立する以前に成立していたと推測する高柳光寿の見解もあるが、そこまで遡れるかどうかは定かではない。通説では、義経と頼朝の不和の発端は、元暦元年六月、頼朝による受領の推挙から漏れた義経が、同年八月六日、頼朝からの推挙がないのに後白河院から検非違使・左衛門少尉に任官され、頼朝が義経の自由任官（勝手に朝廷の官職に就くこと）に激怒して平家の追討使から義経を外したことに求められている⁽²³⁾。しかし、最近の元木泰雄・近藤好和・保立道久氏の義経伝研究では、一方で元暦元年七月の伊勢・伊賀平氏の反乱の研究が進んだこと⁽²⁴⁾によって、この通説は否定されている⁽²⁵⁾。すなわち、この七月には、伊賀の平田家継・伊藤忠清、伊勢の平信兼ら平氏家人による大規模な伊勢・伊賀平氏の蜂起が起こった。伊賀では平田家継が頼朝から補任された伊賀国惣追捕使（実質的には守護）の大内惟義の郎等を討ち取り、伊勢ではかつて木曾義仲追討に当たって義経に協力したこともある平信兼が、鈴鹿山を切り塞いで伊勢国惣追捕使の山内首藤経俊に対抗した。七月十九日に謀叛の張本とされた平田家継は近江において佐々木秀義ら鎌倉軍によって討ち取られたが、伊藤忠清は逃亡し、この合戦で佐々木秀義が戦死するなど鎌倉軍も大きな痛手を被った。義経は伊勢・伊賀平氏の反乱の残党から京都を守

護する任務に当たり、八月十日に平信兼の子息三人（兼衡・信衡・兼時）を六条室町（または六条堀川）の自邸において謀殺し、十二日には平信兼を討つため、自ら軍勢を率いて伊勢国に下向するなどその対応に追われた。事態の深刻さを知った頼朝は、伊勢・伊賀平氏の反乱の鎮圧に専念させるために義経を平家の追討使から外し、京都守護の任務としての検非違使・左衛門少尉任官も結果的に追認した、というのが最近の義経伝研究の義経の任官問題をめぐるほぼ共通した結論である。元木泰雄氏によれば、この年の六月二十日、範頼が頼朝の推挙によって三河守に任命される一方、義経が受領に推挙されなかったのも、頼朝の当初の構想では、義経を平家追討の前線指揮官として出陣させる予定であり、一方範頼には平家追討のための兵糧を三河国で確保する後方支援の国務を担当させる予定であったからである。ところが、義経は伊賀・伊勢平氏の反乱の鎮圧と京都守護に忙殺されて西海の平家追討に出陣することはできず、頼朝は代わりに国務担当の予定であった範頼を急遽平家追討使として八月八日に鎌倉を出立させた、というのが元木氏のこの問題をめぐる解釈である。

この最近の研究を前提とするならば、頼朝が義経と河越重頼の娘の婚姻を進めた元暦元年九月の段階では、まだ義経との間に大きな亀裂はなく、むしろ弟と最も信頼する乳母の孫娘をめあわせることで、源家一族の紐帯を深くする企図があったといえるであろう。河越重頼の娘と義経の婚姻をめぐるのは、古典的な義経伝研究の中にも、義経を監視するために結婚させた可能性を見出す安田元久説もあるが、そこまで勘ぐる必要はなく、「単純な兄頼朝の心遣いとみていいと思う」

(渡辺保)、「頼朝の義経にたいする厚意から出たことと見るべきであろう」(高柳光寿)⁽²⁷⁾などの評言で充分であろう。

『吉見系図』の源範頼の注記によるならば、頼朝のもう一人の代官となった弟範頼も、比企尼の長女丹後内侍と安達盛長の間に生まれた娘と結婚している。源家一族の外戚を比企尼の一族で固めることは、頼朝の政策的な方針であったとしてもいいであろう。そしてそれは、比企能員の娘若狭局が頼朝の長男頼家の妻になったことによって、頼家の時代にまで引き継がれるのである。すなわち、義経・範頼・頼家の三人は(そして、北条義時も)、女系を辿るならば、いずれも比企尼の孫娘と婚姻したことになる。一方、頼朝と同じく北条氏の女性を妻にしたのは、北条時政の娘で政子の妹、阿波局と結婚した義経の同母兄阿野全成(かつての今若)のみであった。

それとともに、この婚姻には、東国に所領や家人の基盤を持たなかった義経を、武蔵国留守所総検校職を掌握した河越重頼の婿にするこ

四 平時忠の娘

平家追討使として山陽道から九州に渡った範頼軍が兵糧の欠乏によって平家を追討することができない中で、元暦二年(一一八五)正月、義経は平家追討のために京都を出発した。そして、四国に渡った義経は、二月十九日に讃岐国屋島で平家軍を破り、三月二十四日に長門国

壇ノ浦で平家を滅亡させ、四月二十六日に京都に凱旋した。この間、河越重頼の娘は(そして恐らくは静も)六条室町邸(または六条堀川邸)で義経の留守を守ったものと思われる。

一方、父の河越重頼については、阿波に渡った義経が屋島に向かう途中、阿波勝浦(現徳島県勝浦郡勝浦町)で平家方の田口成良の弟桜庭良遠を攻めた中の一人として、河越重頼の名が『源平盛衰記』に見えるのみで、⁽²⁸⁾『吾妻鏡』にはその動静は記されていない。壇ノ浦で捕らえられた平宗盛の次男副将(能宗。八歳。『吾妻鏡』文治元年四月十一日条では六歳)は重房に預けられ、重房は義経の命令で京都の六条河原で副将を斬っているから(『平家物語』巻第十一「副将被斬」、河越重頼・重房父子は義経に従軍したと思われるが、これ以上屋島合戦から壇ノ浦合戦にかけての河越父子の動静はわからない。

しかし、河越重頼が義経の舅となつてから実際に義経と対面したとするならば、それは屋島合戦から壇ノ浦を経て京都に凱旋するまでの時期しかない。頼朝が重頼に義経の舅として加えた厳しい処置を考えるならば、重頼が娘を河越荘(あるいは鎌倉)から送り出しただけで、自身は舅となつてから一度も義経と対面していないということはないであろう。屋島から壇ノ浦、それに続く義経の京都凱旋に河越重頼の動向が一切記されていないことには、『吾妻鏡』の操作が感じられる。

壇ノ浦の凱旋から義経が没落して京都の六条室町邸(または六条堀川邸)を引き扱うまでの半年ばかりの間に、河越重頼の娘が義経の正妻としての位置を奪われかねない事件が起きた。すなわち、義経が平時忠(清盛の妻・時子の弟。妹は後白河院の寵姫で高倉天皇の母であった建

春門院平滋子。平家一門に連なるといながら、貴族の時忠は平家においては非戦闘員であつた⁽²⁹⁾の娘を妻に迎えたのである。

『平家物語』巻第十一「文之沙汰」によれば、壇ノ浦で捕らえられて都に護送された前権大納言平時忠は、義経の宿所近く（恐らくは左佐）女牛東洞院。佐女牛小路は六条大路の一筋南を東西に通る現花屋町通）に逗留していたが、義経に押収された秘密の文書が頼朝に披見されたら命がないだろうと考えた。そこで子の時実とも相談して、数多い娘のうち、前の北の方との間に生まれた二十三歳の娘を義経の妻にした。⁽³¹⁾義経と縁戚になることで、秘密の文書を取り戻そうとしたのである。時忠の娘（一一六三）？。『延慶本平家物語』によれば、一一六四―？は、少し歳こそ取っていたが（河越重頼の娘や静より五つ年上ということになる。『延慶本平家物語』によれば四つ年上）、見た目が美しく心ざまも優雅に見えたので、義経はすっかり気に入る、以前からの妻の河越重頼の娘もいたが、時忠の娘のために特別に座敷を品よく飾つてもてなした。⁽³²⁾

さて、時忠の娘は例の文書のことを義経に切り出したところ、義経はあろうことか封も切らずに時忠の許に返却した（『延慶本平家物語』では皮籠（皮で周りを張り包んだ箱）に入れたまま、封も解かず返却したとある。義経は秘密の文書を押収した形のまま返却したのである）。時忠は悦んでこれを受け取り、消却した。どんな文書であつたのか、内容が気になると世間では評判した、というのである。

『吾妻鏡』文治元年九月二日条には、時忠は五月に能登国に流罪と決まっているにも関わらず、義経がその婿になっているので、その好で時

忠は配所に赴かずいまだ在京している、とある。義経が平時忠の娘を妻に迎えたことは事実であろう（結局、時忠は九月二十三日に配所の能登国に向かい、文治五年（一一八九）二月二十四日に能登国で没する。享年六十二歳。能登におけるその子孫が能登時国家となつたのは有名な事実である）。

また、十一月三日、義経が京都から落ちた時、貴族では異父弟の一条能成（義経の母常盤と一条長成の子）とともに平時忠の子・時実（周防に流罪に決まっていた）も随行していた。元木泰雄氏はこの記事から、「これを事実とすれば、時忠一族とは挙兵（義経が頼朝追討の宣旨を受けて、行家とともに頼朝に反旗を翻しての挙兵―引用者）においても密接な関係を有しており、西国において平氏残党の糾合も想定していたのではないだろうか」と述べているが、⁽³³⁾少なくともこの記事は、義経と時実が義兄弟の關係にあつたことの証拠にはなるであろう。それとともに、時忠の娘を妻にしたことが、平家残党との通謀を頼朝に疑われ、義経の没落を早める一因になつたことを推測させる。

時忠の娘で義経の妻となつた女性が、義経没落後どうなつたかは定かではない。『源平盛衰記』では、義経が都落ちする十一月二日の夜、時忠の娘との別れを惜しみ、時忠の娘が和歌を詠んだ話をつけ加えている（巻第四十六「高直斬らるる並びに義経庁の下文を申す。附義経女に遺を惜しむ事」⁽³⁴⁾）。義経の三人の妻妾のうち、没落した義経の逃避行に関わり続けるのは、河越重頼の娘と静の二人である。このことは、義経が平時忠の娘を妻にしても、それによって河越重頼の娘が義経の正妻としての位置を剝奪されたわけではなく、なおも義経の信頼を勝ち得ていたことを意味する。

『平家物語』巻第十一「文之沙汰」によれば、時忠には前の北の方今の北の方（帥典侍・藤原顕時の娘）合わせて娘が多くいた。⁽³⁵⁾時実は、今の北の方（帥内侍）の生んだ十八歳の娘を義経の妻にするように時忠に勧めたが、時忠はこの娘を可愛がっていたので、前の北の方の生んだ二十三歳の娘を義経に見合いさせたという。したがって、義経の妻の妹である可能性が高いが、建久二年（一一九二）四月二十日の賀茂祭に、時忠の娘・平宣子が典侍として供奉している（『吾妻鏡』建久二年五月十二日条）。これが義経の妻ではなく、その異母妹であるとしても（『平家物語』にいう帥内侍との間に生まれた十八歳の娘であろうか）、義経の妻の継母の帥内侍、妹の平宣子はいずれも京都に留まったのであるから、彼女もその後も京都に住み続けた可能性が高いと思う。

五 河越重頼・重房父子の没落

文治元年（一一八五）十月十七日夜の頼朝の命を受けた土佐房昌俊による義経襲撃が失敗して、しばらく過ぎた十月二十三日、鎌倉勝長寿院の落慶供養が翌日に迫った日のことである。この日頼朝は、明日の落慶供養の随兵以下の供奉人に加える予定でいた彼女の兄、河越重房を、突然、義経の縁者（義兄弟）であるという理由によって外した。そして、二十四日の落慶供養には、同族の畠山重忠が随兵として参加し、重頼の妻の実家である比企氏の朝宗は布施を、能員は馬を引いたが、重頼・重房父子の姿はなかった。

さらに、追い打ちをかけるように、義経が吉野山中に潜伏している

十一月十二日、河越重頼は義経の縁者であるとの理由で所領を収公（没収）された。そのうち、伊勢国香取の五ヶ郷は大井実春に給わり、そのほかの所領は重頼の老母に預けられた。この縁坐は、重頼の娘婿であるという理由で下河辺政義にも及び、政義も所領を没収された。結局、重頼・重房父子は、所領を没収されただけでなく、誅殺されたようである。

というのも、河越氏の本領であつた新日吉社（後白河院によって法住寺殿の辺りに勧請された京都東山の新日吉社）領武蔵国河越荘をめぐって、その後、『吾妻鏡』に次のような記事を見出せるからである。

文治二年（一一八六）七月二十八日、新日吉社領武蔵国河越荘の地頭が去年の年貢を対捍（年貢納入の履行を拒否）していることに対する、莊園領主（領家）新日吉社の抗議の御教書が、吉田経房を通じて鎌倉に届いた。鎌倉幕府は、河越荘は地頭の請所（地頭が莊園領主の年貢納入を請け負う代わりに、莊園管理を一任された場所）であるが、領主が幼少のため、年貢未進のままに過ぎたのであらうと考え、武蔵守として武蔵国の国務を執行していた平賀義信に処理するように命じた。そして幕府は、平賀義信の調査を踏まえて、八月五日に経房に次のような返事の請文を差し出した。それによると、河越荘は、去年領家の新日吉社供僧が逝去したので、年貢を納める相手が分からず、領家の指示を待っている間に年貢を支払わない形になってしまった。地頭が恣意で年貢を抑留してきたわけではない。ところが、今、前の領家の孫に当たる禪師が新しい領家となったことが分かった。その旨を承知して、年貢を納入するように地頭に下知した。地頭への命令に際して、新日

吉社の役を優先し、今年から懈怠（怠けること）なく莊務を行うように勵行した、というのである。

これによるならば、河越莊の年貢未進問題は、領家が死去して納入相手が分からないという事情もあったが、一方で、地頭が幼少であることによる不手際もあったことがうかがえる。重頼・重房父子が誅殺され、河越莊は重頼の老母が後見となる形で、重頼の幼い遺児が地頭となつたが、まだ莊務を務められる年齢ではなかつたのである。

さらに、『吾妻鏡』文治三年（一一八七）十月五日条に、次のようにある。

河越重頼は義経に縁坐して、誅殺された。頼朝はこのことを憐憫し、旧領の河越莊は重頼の後家尼（すなわち比企尼の娘）に給わつた。ところが、河越莊の名主百姓らがその指揮に従わないという風聞（噂）がある。今後は莊務といい、雑務といい、重頼の後家尼の下知に従うよう、命令を下すものである、というのである。

以上の記事をまとめるならば、次のようになるであろう。河越重頼は義経の舅であるとの理由で誅殺された。嫡子重房も同時に殺されたことは、『源平盛衰記』に、「武蔵国の住人河越太郎（重頼―引用者）並びに一男小太郎（重房―引用者）誅せられけり」とあることからうかがえる（巻第四十六「義経行家都を出づ並びに義経始終の有様の事」）。その本領であつた河越莊は重頼の老母に一旦預けられたのち、重頼の幼い遺児が地頭に立てられた。しかし、地頭としての莊務を務められる年齢ではなかつたので、結局、母である重頼の後家尼（比企尼の娘）が河越莊の地頭職を安堵された。もとより、これは重頼の遺児が成人

を迎え、河越莊の地頭職を譲ることができる年齢になるまで、重頼の後家尼が莊務を務めたことを示している。ここで一旦は滅亡した河越氏の家督を継いだ遺児は、三代將軍実朝・四代將軍藤原頼経の時代になつて活躍が見出せる、河越次郎重時・三郎重員兄弟であろう。

河越重時・重員の名が『吾妻鏡』に見出せる初見は、重頼の死によつて武蔵国留守所総檢校職を与えられ、河越氏に替わつて武蔵国の武士団の棟梁となつた畠山重忠が、元久二年（一二〇五）六月二十二日、武蔵国二股川（現横浜市旭区二俣川）で滅ぼされた際、それを攻めた北条義時側の軍勢としてである。これも、一つの歴史の皮肉であろう。

重員は嘉禄二年（一二二六）四月十日に、かつて父が掌握していた武蔵国留守所総（惣）檢校職に補任されている。³⁶ただし、武蔵国留守所総檢校職は、畠山重忠の滅亡後、河越重員が補任されるまで誰にも与えられておらず、この時期にはすでに形骸化していたと考えられる。重員の補任は、義経の縁戚として一旦は逆賊扱いされた河越氏の名譽回復的な意味合いが強いであろう。実に、河越重頼・重房父子が誅殺されてから、河越氏が復権するまで、二十年から四十年の年月を経ているのである。

六 義経と河越重頼の娘の逃避行、常盤の庇護と娘の誕生

以上の経緯を見るならば、河越重頼は義経の謀叛に荷担した徴証は史料上うかがえない。それにも関わらず、義経の舅であるとの理由で

加えられた重頼の所領没収・誅殺の措置は、過酷に過ぎるといえよう。しかし、頼朝の立場からすれば、武蔵国留守所総検校職を掌握し、武蔵国最大の武士であるとともに、妻が比企尼の娘である河越重頼は、弟義経の舅とするに相応しい人選であつた一方、義経が頼朝に叛逆した現在となつては、義経の与党勢力となる可能性を持った最も畏怖すべき存在となつたのである。河越重頼の実際の心中はともかく、頼朝は義経の与党勢力となる可能性のある存在を、芽のうちに摘んでしまおうとしたのであろう。

また、河越重頼の没落に、重頼が掌握していた武蔵国留守所総検校職をめぐる同族の畠山重忠やその舅北条時政との対立を見る見解もある。⁽³⁷⁾ 重頼没落後、武蔵国留守所総検校職が畠山重忠に移つた事実を見るならば、頼朝の姻族の間で、義経⇨河越重頼(⇨比企尼?⇨範頼?)と北条時政⇨畠山重忠の確執があつた可能性は考えられよう。

ともかく、義経に縁坐して河越重頼は殺された。その本領河越荘が没収されることなく、重頼の後家尼に相続されたのは、彼女は比企尼の娘であるとともに頼家の乳母でもあり、頼朝の母代わりの比企尼に報いるためであつたのであろう。重頼の後家尼が河越荘の地頭職に補任される文治三年(一一八七)十月五日のひと月前、九月九日の重陽の節句に頼朝は比企尼の家を訪れており、この時比企尼による嘆願があつた可能性も少なくない。以後、重頼の後家尼は幼い重時・重員が成長し、再び歴史の表舞台に登場するまでの二十年間、河越荘を経営して夫の遺領を守り続けた。この当時、夫の縁坐は妻(女性)には及ばなかつたのである。

以上の事情に鑑みるならば、河越重頼の娘も、義経が都落ちする際に謀叛人となつた義経と離婚し、零落したとはいへ、母が所領を守る実家の河越氏に身を寄せることも可能であつたろう。⁽³⁸⁾ しかし、その道を取らなかつたことに、彼女自身の意志を見て取ることができる。

義経が京都から没落した際の『吾妻鏡』の記事には、同行した妻妾として名を留めるのは静のみで、河越重頼の娘の名は見出せない。しかし、大物浜での渡海に失敗して吉野山に一旦潜んだ義経は、比叡山・鞍馬寺など寺社勢力による庇護と朝廷の義経逮捕に対する消極的姿勢もあつて、文治二年(一一八六)中、少なくともその秋までは京都近辺に潜伏している。⁽³⁹⁾ この間に、恐らくは常盤の庇護も得て京都に潜伏していた河越重頼の娘は、義経と連絡を取つて義経の逃避行に合流したのではなからうか。というのも、文治二年、義経の京都近辺の潜伏中に、当時十九歳の河越重頼の娘との間に女の子が生まれているからである。そのことは、文治五年(一一八九)閏四月三十日、頼朝の圧力によつて義経を匿いきれなくなつた藤原秀衡の子・泰衡が義経を衣川の館に襲つた際の『吾妻鏡』の記事に、二人の間の娘がこの時四歳であつたとして、次のように記されていることからうかがうことができる。

今日、於陸奥国、泰衡襲源予州、是且任勅定、且依二品仰也、与州在民部少輔基成朝臣衣河館、泰衡従兵数百騎、馳至其所合戦、与州家人等雖相防、悉以敗績、予州入持仏堂、先害妻廿二子、次自殺云々、

義経と静との男子も文治二年閏七月二十九日に生まれているが、河

越重頼の娘との間の女子は文治二年に生まれたことがわかるだけで、生まれた月日はわからない。文治二年も早い時期に生まれたとするならば、義経が京都から没落した時に河越重頼の娘はすでに妊娠していたことになる。彼女が義経の大物浜からの渡海に同行しなかったのは、義経とは別に身重の体を抱えて京都に潜伏したからなのかも知れない。そしてこの場合、娘を出産した前後に、京都に秘かに戻ってきた義経と連絡を取って合流したことになる。一方、義経との間の娘が文治二年も遅くに生まれたとするならば、文治二年も早々に義経と京都で落ち合い、共に逃避行の最中に、妊娠・出産をしたことになる。もとより、これについてはそのいずれとも断定することはできない。

ところで、『玉葉』文治二年六月六日条によると、義経の母の常盤と義経の妹が京都守護の一条能保によつてからめ取られ、義経の潜伏先を尋問した結果、石倉（岩倉）に潜伏しているとの情報が得られたので、武士を遣わしたところ、すでに逐電した後であったとして、次のように記されている。

伝聞、先擲取母并妹等、問在所之處、称在石蔵之由、遣武士之處、義行逐電了、捕得房主僧了云々、其後事未聞、このことは、『吾妻鏡』文治二年六月十三日条にも次のようにある。当番雑色宗康自京都参着、去六日、於一条河崎観音堂辺、尋出与州母并妹等生虜、可召進関東、歟由云々、

常盤が義経の妹（常盤と一条長成の間の娘）とともに籠もっていたのが、かつて平治の乱に際して、義経ら子どもたちの命の加護を祈った清水寺と同じ、観音菩薩を本尊とする観音堂であったことは興味深い。

一条河崎観音堂（一条河崎観音寺。現京都市上京区梶井町。廃寺）は、一条の南、鴨川の西岸にあり、貞観年間（八五九―八七七）に一演法師が持仏とする観音像を安置して伽藍を構え、感応寺と号したと伝える⁽⁴¹⁾。のち、戦乱で焼けて清和院に合併したといわれ、『京都坊目誌』では、文徳天皇中宮の染殿后明子がこの寺の地藏尊に安産の祈願をして清和天皇が降誕したという伝承を伝えている⁽⁴²⁾。後世の伝承であるため、祈願の本尊は、中世後期以降、子どもの守り本尊として流行した地藏に交替しているが、一条河崎観音堂が清水寺と同じく安産祈願の観音霊場として信仰を集めていたことがうかがえる。

ここで常盤の記事との関連で河越重頼の娘に注意したいのは、義経と河越重頼の娘との間に、常盤が尋問を受けたのと同じ文治二年に女子が生まれていることである。河越重頼の娘は義経没落後、実家には帰らず、京都に潜伏していたものと思われるが、常盤は河越重頼の娘を秘かに庇護してその妊娠・出産の世話をしており、河崎観音堂に籠もっていたのもその安産、あるいは生まれた子どもへの加護を祈願してのことなのではなからうか。というのも、岩倉大雲寺も義経が少年時代を過ごした鞍馬寺の末寺であるとともに、岩倉観音の名で知られており（『山城名勝志』巻第十二⁽⁴³⁾）、河越重頼の娘は、恐らくは常盤の世話で観音菩薩を祀る岩倉大雲寺観音院に匿われ、ここで出産した可能性が高いからである。清水寺といい、一条河崎観音堂といい、岩倉観音といい、常盤の信仰は、安産・子どもの守り本尊としての観音信仰に収斂して説明できることを、ここでは確認しておきたい。そして、実家の河越氏が誅された中で、京都に潜伏し、義経の子を出産した河越

重頼の娘を秘かに庇護したのは、常盤しかあり得ないことも、また推測できるのである。常盤については、彼女を公家社会の政治史・女性史の中に再評価しなおした保立道久氏の優れた研究があるが、しかし、これまでの義経伝研究では、夫義経と実家の河越氏の没落後、河越重頼の娘が誰の庇護を得て潜伏し、無事に義経の女子を出産できたのかという問題に、余りにも無頓着であつたのではなからうか。

頼朝の圧迫によつて、興福寺に匿われたのを最後に寺社勢力の庇護も得られず、朝廷も九条兼実を中心に義経逮捕に積極的姿勢を示すようになった文治三年（一一八七）二月、義経は伊勢国・美濃国等を経て、藤原秀衡を頼つて奥州に落ちのびることにした。その際に義経は妻の河越重頼の娘と、二人の間に生まれた二歳の娘を伴い、一行は山伏や児童の姿に身をやつして奥州に赴いたのである。そのことは、『吾妻鏡』文治三年二月十日条に次のように見出せる。⁽⁴⁵⁾

前伊予守義経（義経）日来隠住所々、度々遁追捕使之害、訖、遂経伊勢美濃等国、赴奥州、是依侍陸奥守秀衡入道權勢也、相具妻室男女、皆仮姿於山臥并児童等云々、

その二年後の文治五年（一一八九）閏四月三十日、頼朝の圧力によつて義経を匿いきれなくなった故秀衡の子・泰衡が義経を衣川の館に襲つた。義経の家人が最後の防戦をしたが、もとより叶わなかつた。

後年、『義経記』によつて弁慶の立ち往生の伝説が有名になるが、『吾妻鏡』には防戦した家人の名は記されていない。『尊卑分脈』の義経の注記⁽⁴⁶⁾では、二十余人の義経の家人が最後の防戦をしたと伝えるが、伊勢三郎義盛・佐藤忠信・伊豆有綱などの名を知られた家人は、すで

に京都近辺の潜伏中に討たれたあとであり、実際にどの程度の家人が残つていたのかは心もとない。義経は持仏堂に入り、先ず妻である河越重頼の娘と四歳の娘を殺し、次いで自らも自害した。この時、河越重頼の娘は二十二歳。義経は九つ年上の三十一歳であつた。

おわりに——静と河越重頼の娘

義経の二人の妻、静と河越重頼の娘を比較して気づくのは、この二人は合わせ鏡のような存在であることである。二人は生まれも同じ仁安三年（一一六八）、義経と出会い、結婚したのも同じ元暦元年（一一八四）、十七歳の時である。そして、同じ文治二年（一一八六）に、静は義経の男子を、河越重頼の娘は義経の女子を生んでいる。死没の歳だけは、河越重頼の娘が文治五年、二十二歳で義経とともに死亡と、二十歳で死んだ静に比して二歳長生きしていることが異なるだけである。

ところが、後世、静は義経伝説の展開とともに著名になり、弁慶とならぶ義経伝説の中核人物として静伝説も成長したのに対して、河越重頼の娘についてはその伝説が義経伝説とともに展開することはなかった。『義経記』では、奥州平泉に義経とともに下つた妻すらもが、河越重頼の娘から平時忠の娘に入れ替わってしまったのである。その原因としてあげられるのは、『吾妻鏡』が静については紙数を割いて詳しい記事を掲げたのに対して、武家社会に出自を持ち、もつと言及されていないはずの河越重頼の娘については、ほとんど記事がないことが指摘できよう。河越重頼の娘について『吾妻鏡』に記事が見出せる

のは、本稿でも引用した元暦元年（一一八四）九月十四日の義経との婚姻、文治三年（一一八七）二月十日の義経に同行しての奥州下向、文治五年（一一八九）閏四月三十日の奥州平泉における死去の三カ所のみなのである。では、なぜあれほど義経に同情した記事を書き、上横手雅敬氏によれば「判官びいき」の根源を形作ったともいえる『吾妻鏡』が、それに付随するかのようになぜ黙して饒舌に語ったのに対して、河越重頼の娘については沈黙を守ったのであろうか。

義経の河越重頼の娘との婚姻は頼朝の計画によるものであった。そして、この婚姻を推進した元暦元年九月の時点では、頼朝は義経に、伊勢・伊賀平氏の反乱が起きる中で京都守護の重要な職務を託しており、義経を排除する企図はなかったことは、すでに言及したとおりである。

頼朝は自らの代官としたもう一人の弟の範頼には、安達盛長の娘を正妻としている。河越重頼の娘も安達盛長の娘も、ともに比企尼の孫娘である。頼朝は文治元年に義経を、建久四年（一一九三）八月には富士の裾野の巻狩における曾我兄弟の事件の余波を受けて範頼を、それぞれ謀反の疑いをかけて追放し、殺さざるを得なかった。しかし、頼朝が二人の弟を殺したのは結果論であって、そうならなければ、頼朝の弟の姻族が女系を辿れば比企尼に繋がる一族で占められたであろうことは確実である。すなわち、頼朝の構想では、源家（将軍家）一族の外戚となるのは北条氏のみではなかったのである。

上横手雅敬氏は、『吾妻鏡』は北条氏を正当化する立場から、義経や範頼に対する頼朝の冷酷な仕打ちを隠さず描き、頼朝像はけっして

理想化されてはいないと述べている。そしてそれは、北条氏の立場から見た頼朝観の反映であり、『吾妻鏡』の義経・曾我兄弟（曾我兄弟は工藤祐経だけでなく、頼朝の暗殺も企んだ可能性がある。その烏帽子親は北条時政であった⁽⁴⁹⁾）・畠山重忠などに同情を寄せる人間造形には、北条氏の立場からの記事の操作が見られるという興味深い指摘をしている。

とするならば、頼朝による源家の婚姻政策が、実は乳母である比企尼の一族にあり、必ずしも妻の実家である北条氏（北条時政の一族）を外戚とする企図はなかったことも、『吾妻鏡』では隠蔽されたといえるのではなからうか。木村茂光氏や『川越市史』によって指摘された、河越重頼が畠山重忠に比して頼朝から無視・排除されたように見える事態も、それは頼朝による河越氏の無視・排除ではなく、比企尼に繋がる河越重頼に対して、畠山重忠は北条時政の姻族であることに由来する『吾妻鏡』の編纂者による記事の選択・操作の結果といえるのである。

頼朝の冷酷な人物造形との対比で、その被害者としての非運の生涯が強調された義経であるが、それに付随して『吾妻鏡』で静の物語が語られたのは、白拍子を職業とする静は京都の文化圏に属する女性であり、北条氏と直接の利害関係がなかったからであろう。しかも、北条政子は頼朝の「冷酷」な仕打ちから極力静を庇っている。

これに対して、河越重頼の娘は比企尼の孫娘であり、その義経との婚姻が頼朝自身の意志で推進されたという意味では、源家の外戚関係をめぐって、直接北条氏と利害が対立する位置にいる女性であった。

『吾妻鏡』が義経に同情を寄せ、「判官びいき」の出発点となったの

にも関わらず、河越重頼の娘に関する記事が極力抑えられたのには、このような理由もあったのではなからうか。極論するならば、『吾妻鏡』は静を持ち上げる一方、その背後に河越重頼の娘の事績を隠蔽したといえるのである。そして、静が義経伝説とともに著名な女性となったのに比して、河越重頼の娘に関する伝説は後世も展開することがなかったことを考えるならば、このような『吾妻鏡』の操作はほぼ成功した、といつていいであらう。

注

- (1) 新訂増補国史大系普及版『吾妻鏡』第一、第二、吉川弘文館、一九七七年。
- (2) 保立道久『義経の登場』日本放送出版協会、二〇〇四年。
- (3) 元木泰雄『源義経』吉川弘文館、二〇〇七年。
- (4) はかに、義経伝に関する近年の著作として、五味文彦『源義経』岩波新書、二〇〇四年。近藤好和『源義経』ミネルヴァ書房、二〇〇五年。京都新聞出版センター編『義経ハンドブック』京都新聞出版センター、二〇〇五年。
- (5) 日本古典文学大系『義経記』岩波書店、一九五九年（岡見正雄校注）。
- (6) 義経と京都北白川の白拍子・静の出会いには、『義経記』巻第五「静吉野山に棄てらるる事」、巻第六「静鎌倉へ下るる事」「静若宮八幡宮へ参詣の事」によれば神泉苑にはじまる。京都に百日の日照りがあった際に、比叡山・三井寺・東大寺・興福寺などの百人の高僧が神泉苑の池で仁王経を講じ、八大龍王に祈雨の祈捧を行ったが、雨は降らなかった。「容顔美麗な白拍子百人を召して、後白河院が御幸して神泉苑の池で舞わせたなら、龍神もこれを受け入れるでしょう」との言を受けて、後白河院が神泉苑に御幸して百人の白拍子を召して舞わせた。しかし、九十九人の白拍子が舞っても雨が降る験がなかった。残る静一人が舞っても龍神が受け入れることはあるまい、との意見もあったが、「百人の数のうち

であるから舞をさせよ」との院の仰せにより、静が舞ったところ、「しんむじやう（新無常力）」という白拍子の曲の半ばにして、洛西愛宕山の方より黒雲がにわかに湧き出て洛中にかかり、稲妻が光つて三日の洪水になった。静の舞を龍神が受け入れたとして、後白河院は「日本」との宣旨を静に賜った。義経は検非違使・左衛門少尉として後白河院警固のため神泉苑に随行していたが、この時に静を見初め、六条堀川の義経の邸宅（『義経記』による。『吾妻鏡』では京都における義経の邸宅は六条室町）に静を召し、静は義経の「妾」となったのであった。以上は『義経記』による義経と静の出会いである。『義経記』は静が鎌倉に下向した文治二年（一一八六）から数えて「先年」の出来事とするだけで、その年を記さないが、これは義経が検非違使・左衛門少尉に任官され、京都の治安維持を担った元暦元年（一一八四）八月ごろのことであろう。史実と照らし合わせるなら、義経が任官される五日前ではあるが、『山槐記』元暦元年八月一日条（史料大成『山槐記』三、内外書籍、一九三五年）に、神泉苑で祈雨のための読経定めが行われたとの記事がある。義経が河越重頼の娘を正妻として迎えたのが元暦元年九月のことであるから、『義経記』の伝説と『山槐記』の記事があえて照合できるものとするなら、静との出会いはそれより僅かばかり早いということになる。静との出会いが元暦元年八月のこととして、静を妾に迎えてから河越重頼の娘を正妻としたのか、河越重頼の娘を正妻に迎えてから静を妾としたのかは、時間的に微妙なところである。

- (7) 河越氏（河越重頼）に関しては、『吾妻鏡』と各種の「河越系図」のほか、『平家物語』諸本によるしかないが、関連史料は、比企氏の史料も併せ、『川越市史』史料編 中世Ⅰ、川越市、一九七五年、参照。
- (8) 岡田精一「武蔵国留守所惣検校職に就いて」（岡田精一編『河越氏の研究』名著出版、二〇〇三年）。野口実『坂東武士団の成立と発展』弘生書林、一九八二年、一八八―一九四頁。同『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年、一六六―一六九頁。
- (9) 貫達人『畠山重忠』吉川弘文館（人物叢書）、一九六二年、二二―

三頁。野口実『坂東武士団の成立と発展』（前掲）、一九一―一九二頁。
同『中世東国武士団の研究』（前掲）、一六六―一六八頁。ただし、貫・野口氏説には、木村茂光「大蔵合戦と秩父一族」（岡田精一編『河越氏の研究』前掲）による異論も称えられているが、今ここではそこまで立ち入ることはしない。

- (10) 日本古典文学大系『平家物語』上、下、岩波書店、一九五九―六〇年（高木市之助・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦校注）。『平家物語』は特に断らない場合は、覚一本にもとづく本書による。

- (11) 国書刊行会編『平家物語長門本』名著刊行会、一九七四年復刻。

- (12) 一ノ谷合戦については、鶴越の「坂落とし」の史実の考証や安田義定の頼朝軍（範頼・義経軍）からの独立性の問題をめぐって、近藤好和『源義経』（前掲）や元木泰雄『源義経』（前掲）がそれぞれの立場から最新の見解を示している。参照されたい。

- (13) 比企尼については、永井路子『源頼朝の世界』中公文庫、一九八二年。野口実『中世東国武士団の研究』（前掲）、一八四―一八五、二〇四―二〇五頁。田端泰子「乳母の力」吉川弘文館、二〇〇五年、参照。

- (14) 浅香山木「治承・寿永の内乱論序説」法政大学出版局、一九八一年、三三四―三三七頁。

- (15) 『統群書類従』第五輯上系図部、統群書類従完成会、一九二七年再版。

- (16) 浅香山木「治承・寿永の内乱論序説」（前掲）。ただし、浅香は前述したように朝宗を比企尼の亡夫の弟とする。なお、佐藤進一『増訂鎌倉幕府守護制度の研究』東京大学出版会、一九七一年、「北陸道」の項参照。

- (17) 北条氏研究会「北条氏系図考証」（安田元久編『吾妻鏡人名総覧』吉川弘文館、一九九八年）。北条氏研究会編『北条氏系譜人名辞典』新人物往来社、二〇〇一年、「北条朝時」「北条泰時」の項、参照。

- (18) 佐藤進一『日本の中世国家』岩波書店、一九八三年、一二三・一四〇頁。

- (19) 『川越市史』第二巻 中世編（前掲）、一四五―一五五頁。

- (20) 木村茂光「大蔵合戦と秩父一族」（岡田精一編『河越氏の研究』前掲）。

- (21) 野口実『坂東武士団の成立と発展』（前掲）、一九一―一九二頁。同

『中世東国武士団の研究』（前掲）、一六六―一六八頁。

- (22) 畠山重忠については、貫達人『畠山重忠』（前掲）、参照。

- (23) 高柳光寿『源義経』文藝春秋、一九六七年、一二六頁。

- (24) 『吾妻鏡』元暦元年八月十七日条。黒板勝美『義経伝』創元社（日本文化名著選）、一九三九年、一三八頁。安田元久『源義経』人物往来社（日本の武将？）、一九六六年、一三〇―一三二頁。渡辺保『源義経』吉川弘文館（人物叢書）、一九六六年、七一―八三頁。

- (25) 伊勢・伊賀平氏の蜂起については、川合康「治承・寿永の内乱と伊勢・伊賀平氏」（鎌倉幕府成立史の研究）校倉書房、二〇〇四年、に詳しい。

- (26) 元木泰雄『源義経』（前掲）。近藤好和『源義経』（前掲）。保立道久『源義経・源頼朝と島津忠久』（黎明館調査研究報告）二〇〇集、二〇〇七年。

- (27) 安田元久『源義経』（前掲）、一三一頁。渡辺保『源義経』（前掲）、七八頁。高柳光寿『源義経』（前掲）、一二六頁。

- (28) 水原一考定『新定源平盛衰記』第五巻、新人物往来社、一九九一年（巻第四十二「義経纒を解き四国に渡る、附資盛・清経の首京都に上すべき由の事」）。

- (29) 角田文衛『平家後抄 落日後の平家』朝日新聞社、一九七八年、は史料を博搜して、平時忠一族についても該博な知識を披露した力作である。

- (30) 『山槐記』治承三年（一一七九）十一月三日条には、平時忠の家が「左女牛の北、東洞院の東」にあったとする（史料大成『山槐記』二、内外書籍、一九三四年）。また、『吾妻鏡』建久六年（一一九五）七月十九日条によると、故平時忠の敷地が左女牛にあったことがわかる。義経の館が六条堀川にあったにしろ、六条室町にあったにしろ、左女牛（佐女牛）なら近接している（六条室町の方が佐女牛東洞院には近い）。

- (31) 『延慶本平家物語』第六本、「時忠卿判官ヲ聳二取事」では、義経の妻となった時忠の娘は二十二歳。北原保雄・小川栄一校注『延慶本平家物語 本文篇』上・下、勉誠社、一九九〇年。

- (32) 原文には「もとのうへ河越太郎重頼がむすめもありしかども、是をば

- 別の方尋常にしつらうてもてなしけり」とある。高柳光寿はこの部分を「義経は河越太郎重頼の娘を正妻に迎えていた。そこで、その正妻を別の建物に移し、時忠の娘を自分の家に引き連れていっしょに住んだ」と解釈し（高柳光寿『源義経』前掲、二〇八頁）、角田文衛氏も「彼（義経―引用者）には、正妻としてすでに河越太郎こと重頼の娘がいたが、その方は別棟の方に移し、座敷を立派に整えて時忠の娘を迎えた」と述べる（角田文衛『平家後抄 落日後の平家』前掲、三九頁）。野口実氏もほぼ同じく「彼女（河越重頼の娘―引用者）は上洛早々、義経が平時忠の女を迎えたために、それまで住んでいた場所から別棟に移されるといふ仕打ちをうけた」と解釈する（野口実『源義経の妻 河越重頼女・平時忠女』武家の棟梁源氏はなぜ滅んだのか 新人物往来社、一九九八年）。しかし、義経は「是をば別の方尋常にしつらう」た相手を、「しつらう」て「もてなし」たのであるから、別の「方」（建物あるいは座敷）にしつらえてもてなした相手は平時忠の娘と解釈するべきであろう。「尋常」も「すぐれた」「品の良い」という意味であり、冷遇を意味しない。角田文衛『平家後抄 落日後の平家』の索引では、河越重頼の娘を義経の「先妻」、平時忠の娘を義経の「本妻」とし、義経が時忠の娘を妻にしたことによって、義経の正妻が河越重頼の娘から時忠の娘に交替したとも取れる記載があるが、河越重頼の娘は、義経が平時忠の娘を迎えたことによっても、義経の正妻としての位置を剝奪されたわけではないのである。ちなみに、『尊卑分脈』では、時忠の娘は「伊与守源義経妾」とされている（新訂増補国史大系『尊卑分脈』第四篇、吉川弘文館、一九五八年、七頁）。義経の正妻は河越重頼の娘であり、平時忠の娘は義経の妾と解釈する立場からの記載といえよう。
- (33) 元木泰雄『源義経』（前掲）、一七四頁。
- (34) 水原一考定『新定源平盛衰記』第六卷、新人物往来社、一九九一年。
- (35) 『尊卑分脈』では、時忠の女子は「伊与守源義経妾」の一人を掲げるのみである。
- (36) 岡田精一「武蔵国留守所惣檢校職に就いて」（岡田精一編『河越氏の研究』前掲）。
- (37) 元木泰雄『源義経』（前掲）、一八二頁。
- (38) 鎌倉時代の離婚をめぐることは、田端泰子「鎌倉期の離婚と再婚にみる女性の人権」（『日本中世の社会と女性』吉川弘文館、一九九八年）、参照。
- (39) 数江教一『源義経―義経伝と伝説―』弘文堂、一九五四年、第二章、参照。
- (40) 国書双書刊行会編『玉葉』第三、名著刊行会、一九八八年。
- (41) 日本歴史地名大系『京都市の地名』平凡社、一九七九年、「河崎観音堂跡」の項。
- (42) 新修京都叢書第十八『京都坊目誌』二、臨川書店、一九六八年、一四二頁。
- (43) 『改定史籍集覧』第二十二冊 山城名勝志、近藤出版部、一九三二年三版。
- (44) 保立道久『義経の登場』（前掲）。
- (45) 『源平盛衰記』にも、「年頃の妻の局河越太郎が娘ばかりを相具して（奥州に―引用者）下りけり。義経が舅・小舅なるに依て（河越氏は―引用者）かく亡びにけり」とある（巻第四十六「義経行家都を出づ並びに義経始終の有様の事」）。
- (46) 新訂増補国史大系『尊卑分脈』第三篇、吉川弘文館、一九六六年、三〇四頁。
- (47) 島津久基『義経伝説と文学』明治書院、一九三五年。角川源義「義経記」の成立」（『語り物文芸の発生』東京堂出版、一九七五年）、参照。
- (48) 上横手雅敬『源義経』平凡社ライブラリー、二〇〇四年。
- (49) 石井進『中世武士団』（日本の歴史12）小学館、一九七四年。
- (50) 木村茂光「大蔵合戦と秩父一族」（岡田精一編『河越氏の研究』前掲）。『川越市史』第二卷 中世編（前掲）。

